

『大般涅槃経』漢訳とその重訳チベット語訳の成立と展開 (佐藤直実)

本発表は、大乘『大般涅槃経』(以下、涅槃経)の研究上、重視されてこなかったチベット語重訳経典の価値について、荒川真菜氏の修士論文をもとに、検討を試みるものである。

涅槃経には完全なインド原典が現存しないため、内容を知るには漢訳とチベット語訳に頼らざるを得ない状況にある。漢訳には、インド原典から翻訳された曇無讖訳(全 40 巻)と法顕訳(全 10 巻、全体の 1/3)、これら 2 訳をもとに中国で編纂された通称「南本」と呼ばれる経典(全 36 巻)の合計 3 本がある。チベット語訳には、インド原典から翻訳されたもの(以下、〈翻訳〉)と、曇無讖訳からの重訳(以下、〈重訳〉)の 2 本がある。〈翻訳〉の分量は全体の 1/3 のみであり、残りの 2/3 に対応するインド原典からのチベット語訳はない。

〈重訳〉は、〈翻訳〉に比べて資料的価値のないものと見なされ、涅槃経研究に際し、取り上げられることがなかった。しかし、荒川氏はあえてこの〈重訳〉に着目し、曇無讖訳との比較を行い、その成果を 2 年前に修士論文として提出した。同論文では、阿闍世王の登場する梵行品に焦点が絞られている。梵行品は、法顕訳や〈翻訳〉には含まれない章であり、荒川氏が〈重訳〉を扱ったのは、そのためと考えられる。

荒川氏は、次の 2 点を指摘している。1) 〈重訳〉が確かに曇無讖訳から翻訳されたものか否かを検証した結果、重訳である信憑性が高いこと。2) 曇無讖訳には記されるが〈重訳〉では欠落している箇所を指摘し、当該箇所が後代に曇無讖訳(漢訳)に付加された可能性が高いこと。

いずれも、立証には到っていないが、興味深い指摘である。そこで、発表者は、荒川氏の成果をもとにさらに検討を加える。まず、1) に関しては、重訳である信憑性が高いことに加え、翻訳を行ったチベット人が、漢訳の内容を把握せずに漢文を機械的に翻訳した可能性がある。2) に関しては、後代に付加されたというよりも、欠落箇所を含むものと含まないものの 2 通りの伝承があったと考える。

重訳は、経典内容を知るためには価値は低いかもしれないが、チベットで翻訳される際の状況を知る手がかりになる。また、涅槃経のように資料が少ない経典の場合は、その成立と発展過程を知るのに有用と言える。

近年、涅槃経インド原典の研究が発表され、また、曇無讖訳の英訳の刊行が予定されるなど、多くの研究者によって涅槃経研究が進められている。その中で、〈重訳〉研究を進める意義はあると発表者は考える。